

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	いやされない傷 - 児童虐待と傷ついていく脳 -
Author(s)	友田, 明美
Citation	
Issue date	2010-12-11
Type	Presentation
URL	http://hdl.handle.net/2298/17531
Right	

児童虐待によって脳がどのように傷ついていくか

熊本大学大学院生命科学研究部小児発達学 友田明美

児童虐待と向き合う

私の経歴を紹介します。私は 87 年に医者になり、小児科医になろうと思って熊本大学にある小児発達学、発達小児科というところに入りました。そしてすぐに鹿児島市立病院へ行きました。まだ右も左もわからない研修医のときに、ER という救急救命センターで当番をしていたことでした。その時、三歳の男の子が脳内出血で救急車で運ばれてきました。階段で転んだのかな？交通事故にあったのかな？そう思いながら衣服を脱がせたら、全身に「跡」がたくさんありました。たばこの火を押しつけたような、やけどの跡がたくさんあったのです。それから、いろんなところに青い痣がありました。ぱつと一目で、「これは普通の事故じゃないな」と思いました。まぎれもなく、実の両親がその男の子に殴る蹴るの暴力をして、最終的に脳内出血を起こして運ばれてきたのです。私はその男の子を必死で助けようと思いました。三日間、集中治療室で看病しました。だけど助かりませんでした。私にとって、それは非常に強いインパクトのある症例でした。

子供を一生懸命に育てて、可愛がって、愛着を与えないといけないはずの親が、なぜ子供を死にいたらせるのか。にわかには理解できませんでした。でもだんだんわかってきました。子供の虐待という深刻な現実が、この人間社会にはあるということ。それはアメリカやヨーロッパだけの話ではないのです。日本国内にもいっぱいあります。二、三日前に実態数の速報値がでました。去年、四万件を超えました。このこと（児童虐待）を何とかしなくてはいけないという思いが、多分、今の私のライフワークになったと思います。

そのあと熊本市民病院の新生児医療センター、北九州市立総合療育センターなどで小児神経学や脳の発達などを勉強して熊大に戻ってきました。小児神経を主にやっていたのですが、2003年に気持ちを固め、思い切って二人の子どもを連れてボストンのハーバード大学に留学いたしました。3年間、発達脳障害や児童虐待ストレスによって脳がどのように変化していくかということを経験して帰国しました。

児童虐待とはどのようなものか

そこで、今回の本題『虐待、子どもを不当に扱うこと』についてお話します。みなさんには縁がないように思われるかもしれませんが、今、増えているのは事実です。だから皆さんにも知ってもらいたいと思うのです。

まず、「ネグレクト」。これはたとえば、朝から晩まで菓子パンやカップヌードルだけしか与えなかったり、もっとひどい場合、ご飯を食べさせない、育児を放棄する、子どもを置いてきぼりにする、そして、一番マスコミを騒がせ、私たちの目に付く殴る蹴る「身体的暴力」。このほかに、言葉の暴力などによる「精神的虐待」。みなさん、言葉の暴力だけじゃ傷つかないと思っているでしょうが、人の脳というのは暴言によっていろんな影響を受けます。それから「性的虐待」。これは特に女兒に多いですが、男児にも多いです。アメリカでは性的虐待を受けた子どもたちがその後悲惨な人生を歩んできたという事実も、わかってきました。

まず、「ネグレクト」についてもう少しご紹介しておきます。先ほど説明したように、十分な食事も

与えない、ひどい場合にはおにぎりや菓子パンを玄関に投げ捨て、「これを食べろ」と言ったりする親も増えています。この前、小学5年生の女の子が外来に来たのですが、その女の子はパンツが丸見の服を着ていたのです。その子は幼稚園の頃から同じスカートを履かされていたのです。つまり、子どもの成長にあわせて衣服を与えるということ、それができていない。子どもの成長にあわせて衣服を変えたり、身だしなみを整えたり、髪の毛を切ってあげたり、そういうことをしない「衣服ネグレクト」も増えてきています。また、子どもをお風呂に何日も入れない、汚れたままの衣服でいさせる「衛生ネグレクト」も増えています

それから、「愛情遮断症候群」。初めて聞く人が多いと思います。みなさん、子どもの成長には愛のある語りかけが必須なのです。「おはよう」や「今日はどうだった?」、そういう優しい語りかけによって子どもの脳から成長ホルモンが出るのです。逆に、愛情のある語りかけがないと、身長、体重が止まり、成長が止まってしまうのです。観葉植物に水を与えるとき、愛情の言葉をかけるとすくすく育ちます。人間も同じです。人の子どもも人間ですから、愛情の言葉をかけ、それから愛情のある眼差しが必須なのです。そういうことを一切しない「情緒ネグレクト」が増えてきているのです。

そして、子どもの安全を守れない「環境ネグレクト」。毎年ある例としては、両親がパチンコ屋に行き、子どもはエアコンが効いていない車内に置き去りにされ、最終的にガス欠で車内はサウナ以上の暑さになり熱中症で子どもが死亡する、という事例です。それから、四、五年前にあった、ある母子家庭の事故です。その家庭には二歳の男の子がいました。そのお母さんはまだ若くて、どうしてもスノーボードに行きたかった。しかし、雪山に行くということは、一晩かけて行かないといけません。どうしても行きたかった彼女はわが子を置き去りにして、こたつの上に菓子パンをおいて友達と行ったのです。そして、帰ってきたら、ストーブの火から引火して家は丸焼け。もちろん、子どもも還ってきません。そういう「環境ネグレクト」も増えてきています。アメリカでは、家に10歳未満の子どもたちを置いて外出するだけで、逮捕されます。

それから、私たち小児科医が一番心を悩ませるのは「医療ネグレクト」です。適切な時期に予防接種を受けさせないというものです。保健センターから連絡が来るのに「面倒臭い」や「しんどかった」などの親の都合で、連れていかないのです。小学生でポリオのワクチンを飲んだことがない子ども、また、水痘や麻疹などは任意ですが、その予防接種をしていると、症状が軽くてすむのです。そういう予防接種を受けさせない親が増えているのです。前にこういう事例がありました。児童相談所から連絡があり、お腹が膨れ上がった小学校五年生の母子家庭の女の子がいました。普通ならばおかしいと思い、病院に連れていきます。しかし、その子の母親は、経済的な問題で連れていかなかったのです。そして、児童相談所から連絡があつて診たときには、お腹に末期のガンができていたのです。化学療法をしても手遅れでした。そのような「医療ネグレクト」が増えているのも事実です。

ほかにも、北九州である事件が起こりました。二十歳を過ぎた男の人が万引きして逮捕されました。その男の人は、小学校も中学校も高校にも行っていなかったのです。なぜなら、戸籍が無かったからです。その家は両親揃っていて、健康です。姉もいましたが、その姉は高校も出て、社会人でした。どうしてその男の子に戸籍がなかったのか、それは経済的に余裕が無かったからです。学校へ行ってないから、ほとんど勉強もしていません。そのような「教育ネグレクト」も増えています。

子ども時代だけで終わらない児童虐待

ここで、今日の私の論点を紹介します。「子供時代に虐待を受けた影響は、人生のあらゆる時期に様々

な形となって表れる」。子どものときに虐待を受けた影響というのは、子ども時代に終わらないのです。子ども時代に虐待の現場から引き離れた、それで、「めでたしめでたし」、とはいかないのです。子ども時代に受けた影響とは、悲惨なことに、人生のありとあらゆる時期に様々な形をとって表れるのです。

私は様々な講演に行くのですが、時々60代以上のお年寄りからも声をかけてもらうことがあるのです。「実は自分も小さい頃、父親から虐待を受けていました。どうして僕はこんな悲惨な人生になってしまったのだろうか。いろんな症状に苦しんでいる。いまだにカウンセリングを受けている。」思春期、青年期、壮年期、そして老年期。老人になっても虐待によっての影響は出てくるということです。

虐待を経験した人たちの怒り、恥ずかしさ、それから絶望感、このようなことが内側に向かって表れると、「うつ」「不安」「自殺企図」「PTSD」となります。PTSDとは、津波、ハリケーンなどの大災害で死ぬほどの大変な目にあった人たちが、災害が終わった後もフラッシュバックとして頭の中にそのことが現われたりすることです。

虐待の経験が外面の性格に影響すると、もっと問題です。攻撃的になる、すぐキレてしまう「衝撃性」、いろんな犯罪行為に走る「非行」、そして恐ろしいのがお酒や薬に走る「薬物濫用」、そして「多動」の症状が出ます。

子ども時代の虐待経験と大人になってからの影響を紹介します。まず、小さい時期に虐待を受けると「うつ病」になりやすいです。そして、先ほども説明した「PTSD」。夜中にフラッシュバックとして嫌な思い出がよみがえってくるのです。他にも、コロコロと人格が変わってしまう「多重人格」があります。そして、もう1つ紹介するのは、「境界性人格障害」です。虐待を受けた影響で境界性人格障害になる人が多いのです。本人はこういう病気だと分からないから、病院になかなか行きたがらないのです。特徴を紹介します。虐待の中でもっとも厄介な症状の1つです。他人を黒か白でしか判断しなくなるのです。つまり、グレーゾーンが無いということです。長所は認めるけど短所は認めないのです。ある人を最初は尊敬していたのに、一度その人からちょっとでも裏切られたり幻滅させられたりすると、一転して激しく、中傷するのです。その典型例がストーカーです。そして、怒りを爆発させやすく、他人と安定した関係が築けないのです。親子関係も、職場関係もうまくいかないのです。それから逃れるように薬やお酒に走ります。そして、リストカットなどの自傷行為に走ったり、過食や浪費に走ったりします。そういう境界性人格障害も虐待の影響によって表れます。

次に、思春期に出てくる精神症状を紹介します。「うつ状態」、それから「PTSD、過覚醒（警戒待機状態）」です。過覚醒とは、例えば戦時中にいつ敵が襲ってくるか分からなくて眠れない状態になることです。児童虐待の状況に当てはめると、虐待の現場から引き離してもぐっすり眠れないのです。それからキレやすい「衝動性」、気分がコロコロ変わる「気分易変」、自分だけが愛されていないと思う「被害念慮」、そういうのがあります。そして問題行動として「非行」（とくに性的逸脱行動）です。それから「家庭内暴力」、学校で人間関係がうまくいかなくなり「学校不適用」などがあります。そして「薬物濫用」です。

脳に刻まれる「癒されない傷」

これからが私の仮説です。私の仮説は「身体的な経験を通して発達していく中で、虐待という激しいストレスの衝撃により、子どもの脳には癒されない傷ができてしまう」というものです。それが研究を重ねていくにつれてだんだん解明されてきました。簡単にいうと、児童虐待は「脳の発達に影響を及ぼしてしまう」ということです。虐待を受けて大人になった人の脳は、“壊れたハードドライブ”のよう

に、ボロボロになってしまいます。虐待は、子ども時代だけでは終わらず、大人になっても影響が出てきてしまいます。ストレスホルモンが脳の発達を遅らせます。子ども時代の虐待ストレスによって、情動の中心である扁桃体が過剰に興奮し、副腎皮質から大量のストレスホルモン（コルチゾル）が放出され、脳の発達がダメージを受けます。扁桃体とは、私たちが赤ちゃんなどを見て、可愛いと思うときなどに活発に反応します。

性的虐待を受けると、視覚から得た情報が蓄えられる視覚野が傷付いてしまいます。さらに、長い期間性的虐待を受けるほど、視覚野が深く傷付き、その容積が小さくなるということが分かりました。つまり、長い期間性的虐待を受けるほど、癒されない傷が大きくなるということです。

言葉の暴力には、「叱りつけ」「囃し立て」「侮辱」「非難」「おとしめ」「恐怖を与える」「卑しめる」「嘲笑」「批判」「過小評価」などがあります。

例を挙げると、日常的に朝から晩まで「お前は生まれてこなければよかった」「死んだ方がましだ」などと親から怒鳴られたりします。言葉の暴力によっていろんな影響が出てくることが分かりました。暴言の頻度が多かった人ほど、聴覚野に大きな影響が出てしまいます。つまりその容積が大きくなることわかったのです。聴覚野は、スピーチ、言語、コミュニケーションに重要な役割を果たしている領域です。つまり、殴る蹴るだけじゃなくて、言葉の暴力の虐待も無視しないでほしいと私は言いたい。

ところで、世間では「虐待はいけないけど、体罰はいいでしょう」と言う。昔は、世の中に非常に強いお父さんが多くておしりを叩いたり、ビンタをしたりなどの体罰が当たり前の時代がありました。しかし、今はやっぱり体罰はいけないという流れに変わってきています。もう亡くなった私の父も、私が小さい頃にちょっと悪いことをしたときにおしりを叩いたりしていました。今でもおしりを叩かれたときを思い出すと、胸が苦しくなります。緩い体罰ではなく、例えば、親が躰と称して杖やベルトや鞭でおしりに青いあざができるまで毎日体罰を与えていたという人たちの脳にどのような影響が出るのかというと、前頭部、すなわち、みなさんの心があるところに傷が付きます。みなさんの心は、胸にあるわけでも、心臓にあるわけでもなく、脳にあります。長期体罰の影響というのは、非常に問題があります。

体罰についてのこれまでの一般的な見解として、『プラスになる“しつけ”効果』と『マイナス効果』の境界線があるはずなのに、それがとても不明瞭なのです。体罰によるマイナス効果を避けるために家庭における“しつけ”を考え直す必要があるのです。

また、子ども時代にDV（家庭内暴力）を目撃するだけでいろんな影響が出てくるということが分かってきました。知能指数が下がり、記憶力も下がり、学業も続かないのです。DVを「見させる」、「目撃させる」、それだけで心理的虐待であるのです。

虐待で傷ついていく子どもの脳は、環境に過敏に反応して適応していくのです。フラッシュバックや声が出なくなる失語症などのいろんな症状として出てくるのです。

ところで、皆さんは日本で先駆けてできた「赤ちゃんポスト」を知っていますよね。赤ちゃんポストの第一号を皆さんは覚えていますか。なんと3歳の男の子だったのです。福岡から父親に連れてこられました。「かくれんぼをしよう」、父親からそう言われて男の子は隠れていました。お父さんがいつか見つけてくれるだろう、そう思って男の子は暗く小さい赤ちゃんポストの中に隠れていました。「もういいかい」「まだだよ」。その声がだんだんと小さくなっていき、結果的にその父親から捨てられたのです。私はその事例を知ったときに、その子は3歳で、『三つ子の魂百まで』と言いますけれども、暗い小さい箱の事を忘れてくれてほしいなあと思いました。そして、私は調べました。楽しい、辛い、悲しい、そういう思い出を貯めておく「海馬」というものが脳のあるところにあります。その海馬の発達が何歳

の時から始まるのかということ調べました。そうすると、3歳から4歳。まさしく、あの男の子の年齢の時に一番、海馬に影響があるということが分かりました。この事実を知ったとき、辛かったです。あの男の子は悲しく辛い、赤ちゃんポストの記憶をずっと引きずって大人になっていくのだろうと思うと、とても辛い思いをしました。それから、右と左の脳の情報連絡・統合を行う「脳梁」というところが一番影響を受けるのは8歳から10歳、小学校でいうと4年生から5年生のとき。この時期に虐待を受けると恐ろしい問題が出てくるのです。そして、皆さんの心が存在する前頭前野が一番感受性をもつのは、中学生の時期です。この時期に陰湿ないじめなどを受けると、子どもはうつになり、最悪の場合自殺します。この13歳から15歳の時期、心がダメージを受けやすいのです。

幼児期には「反応性愛着障害」という障害がでて、学童期には「多動障害と破壊的行動障害」が表れ、思春期には「PTSD」の症状が表れ、青年期には人格がコロコロ変わる「解離性障害および行為障害」へ展開し、成人期には犯罪行動を引き起こしてしまう「複雑性心的外傷後ストレス障害」となってしまふのです。これは同じ人なのです。症状がずっと続いていくのです。

それを、私たちは「発達性トラウマ症候群」、「いやされない傷」、「第四の発達障がい」、「社会性発達障がい」というように名付けてきました。行動としては、異常な警戒感をもったり、過食、盗食、排便・排尿障害、大人びた行動、多動、嘘をつくのがとても上手な虚言、自傷行為、自殺行為などを伴います。精神面としては、さまざまな発達の遅れ、うつ、言葉が出なくなる緘黙、パニック、気分がコロコロ変わる気分易変、学業不振、自分だけが認められないと思ってしまう被害念慮などの症状が出ます。

「癒されない傷」に立ち向かう

さて、皆さんに質問です。「癒されない傷は治らない傷でしょうか?」。私は『いやされない傷』という本を書きました。私は、癒されない傷は、癒されにくい傷ではあるけれど、最終的に治る傷であってほしいと思っています。

ある事例があります。赤ちゃんがいました。この赤ちゃんは祖母から暴言虐待を受けていました。それにより生後9ヶ月の時にほとんど周りとの視線を合わせなくなりました。暴言虐待があると分かり、祖母とこの赤ちゃんを虐待の現場から引き離しました。そうすると、笑顔を取り戻しました。

つまり、早い時期に解明して、早い時期に虐待現場から引き離すと笑顔を取り戻したり、症状が落ち着いたりするのです。虐待の期間が長かったり、虐待現場から引き離した後のケアがうまくいってなかったり、そういった人たちでは症状が長引くのです。小さい頃に虐待、育児放棄をされると幼児期ストレスとなり、心に残ります。そしてその人が親になった時に、自分の子に対して虐待や育児放棄をしてしまう、その連鎖が止まらないのです。なんと被虐待者の60%以上が虐待者になります。それを止めるのが最大の問題だと思います。

何度も言いますが、子ども時代の虐待が発達や情緒・行動両面の問題を引き起こし、子どもの一生に影を落とすのです。被虐待者が“こころ”に負った傷は簡単には癒されないのです。だから、回復可能なうちに虐待を発見し、社会的な支援を行っていくことが重要なのです。

しかしながら、親も子どももなかなか虐待を打ち明けてはくれないのです。なぜなら虐待している親は、「しつけをしている。」と言うからです。そして子どもは、どんなにひどい虐待を受けていても周囲になかなか打ち明けようとしません。児童虐待は「家庭」という密室の中で行われるから気づかれにくいのです。

だからこそ、周りにいる誰かが気づかないと児童虐待を発見することはできないのです。

こんな子どもを見かけたことはありませんか？不自然な傷や打撲の跡がある、着衣や髪の毛がいつも汚れている、表情が乏しい、夜遅くまで一人で遊んでいる、などです。また、親側からも「虐待」のサインを受け取ることができるのです。子どもを避けるようにする、子どもの行動に無関心・冷淡、子どもへの接し方が乱暴・ぎこちない、などです。

そして、被虐待児へのこころのケアを紹介します。虐待を受けた子ども達には適切な世話をし、新しいストレスを与えてはいけません。そうすると、子どもは攻撃的にならず情緒的に安定して、他人に共感する社会的な能力の備わった大人になります。それから、安心して生活できる場の確保、子どもの生活・学習支援をすること、フラッシュバックへの対応とコントロール、解離に対する心理的治療も必要となってきます。

次に私が紹介するのは、私がめげていた時期に届いた被虐待者からお手紙です。その女性は10歳の時から性的虐待を受け、脳が傷つきました。しかし、その女性は26歳の時に音楽と出会い、心が癒されました。そんな女性からの応援の手紙で私は頑張らなくちゃ、と思いました。

それで、『ストレスを克服する力を脳科学する』というものを研究しています。悲惨な虐待を受けた方の中でも、ある市の市長さんになった方もいます。ちゃんとしたケアを受け、克服できるのです。その克服する力というものを脳科学で研究しています。その結果が次に皆さんと会うときにでも紹介できればと思っています。

約2年前、日本の研究者が「食べ物やお金と同じように“褒める”ことも『報酬』として脳内で処理されている」ということを見つけました。今の子どもには自信がありません。だから、否定するのではなく、褒めてあげてください。お小遣いを増やす必要はそんなに無いのです。食べ物やお金と同じように褒めることも、ご褒美として子ども達には響いているのです。

『命がけのゆりかご』を求めて

最後に『命がけのゆりかご』を紹介します。2008年5月21日に中国で四川大地震が起きました。その時、がれきの中から発見された母親がいましたが、四つん這いになったまま息絶えていました。しかし、その体の下で生後間もない赤ん坊が奇跡的に生きていたのです。その母親が「もしあなたが生き延びたら、私が愛していたことを忘れないで…」というメールを携帯に残していました。この母親は幼い子どもの未来を守ったのです。熊本には、事情があつて子どもを捨ててしまう『このとりのゆりかご』があります。かたや中国には自分の身を賭して子どもの身を守る『命がけのゆりかご』があります。私は、本来あるべき親の姿は、『命がけのゆりかご』だと思います。

心の絆を育む健全な次世代をつくるために、子ども達の笑顔を取り戻す作業はこれからが大事です。